

小学校 6 年～高校 1 年の女の子と保護者の方へ

## 子宮頸がん予防ワクチン（HPV ワクチン）について

一般社団法人 小金井市医師会

子宮頸がんは世界的に、女性がかかるがんの中で 2 番目に多いがんです。日本では毎年約 11,000 人が子宮頸がんにかかり、約 2,800 人が亡くなっています。20 代後半～40 代の発症も多く、30 歳代までにがんの治療で子宮を失う方も毎年約 1,200 人います。子育て中の母親の命をうばうことから「マザーキラー」と呼ばれてもいます。

子宮頸がんの原因の 95%以上がヒトパピローマウイルス（HPV）感染によるものです。 HPV はとてもありふれたウイルスで、200 種類以上の型あることが知られています。8 割以上の男女が一生のうちいずれかの型のものに一度は感染しています。子宮頸がん予防ワクチン（HPV ワクチン）はリスクの高い型を中心に複数の型の HPV 感染を予防するために作られたワクチンです。HPV ワクチンでカバーする型の HPV 感染を 90%以上防ぐことができ、4 価ワクチンを 17 歳未満で接種すれば、子宮頸がんのリスクを 88%、17 歳以降では 53%抑えることができると報告されています。

HPV ワクチンは世界的には、2007 年から接種が開始され、先進国のみならず途上国も含む 90 か国以上で定期接種になっています。日本では 2010 年度から公費助成が開始され、2013 年 4 月に小学校 6 年生から高校 1 年生の女子を対象に定期接種化されました。しかし、ワクチン接種後に広範な疼痛や運動障害などの「多様な症状」が一部から報告され、同年 6 月に厚生労働省は「積極的接種勧奨の差し控え」を出しました。その後、国内外で行われた多数の詳細な検討により、これらの多彩な症状とワクチンの因果関係は否定されています。HPV ワクチンは他のワクチンに比べて特に重い副反応が起こりやすいわけではありません。

WHO（世界保健機関）、CDC（アメリカ疾病予防管理センター）、日本の主要な公的機関（日本産婦人科学会、日本小児科学会など）はいずれも HPV ワクチンの接種を推奨しています。先進国で接種の勧奨を取りやめた国は日本だけで、国外からも問題視されています。将来、先進国の中で日本だけが、多くの女性が子宮頸がんて妊娠できなくなったり、命を落としたりすることがないよう、国民一人一人の HPV ワクチンへの正しい理解が必要です。

同封の厚生労働省のパフレット「小学校 6 年～高校 1 年の女の子と保護者の方への大切なお知らせ」をお読みいただき、HPV ワクチンのメリットデメリットをご理解の上、接種をご検討ください。